

後でこれは意味あつたなっていうカードを増やして

けばなんとでもなると思うよ

語り手 濱野優貴（高校七期生 教員） 聞き手 若松陽花

*

学びの原点

―立守に入ろうと思ったきっかけとありますか。

一つは、姉が中学受験してたので、なんとなく自分もそういう感じかなっていうのは思っていたのと、多分オープンキャンパスでおもしろそうやなと思ったのと。若松さんは中入生ですか。

―高校からです。

中学の方は、中一の総合学習が琵琶湖博物館と一緒にやるみたいなのが当時はあつて。琵琶湖博物館とか環境とかのことがすごい好きやったんで。オープンキャンパスの時にその展示みたいなのを見て、「もうこれや！」って（笑）。「琵琶湖博物館にただで何回も行けるなんて最高すぎる！」と思つて。それで選んだのが一番大きかったかな（笑）。

―小さい頃から生物とか好きだったんですか。

そうやね、結構、植物とか。あと、父親の影響で釣り行ったりとか。おばあちゃんが畑してたから、月一ぐらいでおばあちゃんちへ行ったり、琵琶湖博物館もよく連れてつてもらってたし。そんながずつと好きやつて。その割に、社会の教員になったんやけどな（笑）。

―それはなんでですか。

なんやろね。高校ぐらいの時に、中学から自分は私立の学校に入れてもらえてると。で、比較的、お家が経済的に裕福っていうか、ゆとりが

あつたから、それができたし、大学も行けますというのがある。一方で、世の中にはそうじゃない子が山ほどいるというのをすごい感じて。この学校に進学すると、立命に行ける。で、その中でどこに行くかみたいな。点数どうのこうのというよりは、自分の関心がどこにあるとか、そういうところで選べるっていう感じやった。

でもどうやら、自分の小学校の時の同級生とか周り聞いてると、そんなのは非常にレアだというのが分かってきて。そういう時に、家の経済格差とか、受ける教育にもすごい影響してるっていうのが嫌やなっていうのを思つてた。それから、経済学とか教育の格差みたいなものにすごい関心を持つて。ちょうど同じぐらいの年齢の時に、当時も卒論みたいなのがあつたから、海外留学の経験と経済格差の問題とかってどうなんやろうとかを本で調べたりして。それで、経済やなっていう。それがきっかけかもしれない。

*

誰もが主役になれる空間

―立守で一番思い出深い行事とか、部活とか何でもいいんですけど、そういうイベントとかってあつたりしますか。

行事はもう絶対、文化祭。

―文化祭すごいですね。

あすなろ祭。めっちゃ楽しかったね。毎年あれを一番心待ちにしてた。

―私もです。

確か高校ですつとプロジェクト・リーダーしてた。もう、めっちゃ楽しくて。

―プロジェクト・リーダーめっちゃ大変じゃないですか。

大変やね。でもおもしろい。今はわからんけど、あの当時はプロジェクト・リーダーが二人とかオッケーやって、友達と二人でしてたね。

三年生は市民ホールで演劇やって、ミュージカルのアニーをやることになったんよ。吹奏楽部がめっちゃ多いクラスやって、「吹部の子、演奏できひんか？」みたいなになって。吹部の部長もいたから、行けるかもみたいな（笑）。だから生で演奏して、趣味でドラムやってる子がドラムやってとか。プロジェクト・リーダーと言いながら、あんま大して僕はやってないかな（笑）。

みんな、めっちゃすごくて。主役の子とか、歌めっちゃ上手な子がいて、だからすぐえってずっと思ってた。逆に言うと、出えへんからさ、プロジェクト・リーダーは。練習してんの見てるから。「今日はどの場面やります。」みたいなのを最初に喋るんやけどさ、もう勝手にどんどん進んでいくから、すげえ、すげえってしか思わなかった（笑）。この人らすげえなみたいな感じやったね。衣装とかも、どんどん進んでいくからさ。あの辺のバイタリティっていうか、すごいよね、立守。

―リーダーみたいな子がいますよね。

そう、そう、そう。で、隣とめっちゃ競っての感覚で生きてへんやんか。点数云々とか。やからかもしれんけど、発言しにくい子も当然いるやん。そういう場面でもそういう子が意外と絵が上手とかあったりするやんか。そういうのを見れる人がすごい多いなって思ってた。

―確かに、確かに。

前に前に出る、いわゆる陽キャみたいな子が、いわゆる陰キャみたいな子に声かけたり、一緒にやろうやみたいな感じが自然にあるのがすごいなって。当時もいい人達やなって。

―めっちゃわかります。

恵まれてるなってすごい思ってたから。その時の担任が英語の先生やって。その先生の考え方もあって。アニーって一九二〇年代のアメリカが舞台なんやけど、世界恐慌で景気悪いから孤児がいっぱい出て、その一人がアニーで。「そういう時代背景とかをちゃんとわかってやろう」って言うてくれはって。

劇とか始まる前に図書館で本借りて、当時まだiPadない学年やから。あんま覚えてないねんけど、グループごとに模造紙でその時代調べて、それ見て脚本とか作ったな。「こういう時代背景やから、この話はこのフリーズ入れるべきやろ」みたいな。急にちよつと勉強っぽくなるけど、当時の大統領が云々みたいな話をちよつと入れたりしてた。「だからこういう時代になってんのやな」みたいなのが分かるようにしようとか言いながら作って。それも社会おもしろいなと思ったかな。そこもめっちゃいい先生と、いいクラスに縁があったなって思います。行事はそれがダントツかも。毎年の文化祭がめっちゃ面白かった。

*

行けなかったタイ、広がった世界

―濱野さん自身が、高校で頑張って磨こうとしてたスキルとかありますか。

いやー、そんなんない（笑）。そんなよくできた生活してなかった

（笑）でも、どうやろな。スキルな。

―課題とか多くなかったですか。

確かに。プレゼンとかあるでしょ。

―めっちゃあります。探究の授業とかなかったですか。

当時、ふわっただけやった。そんなにガッツリは（笑）。

―何されておられたんですか。

当時はさっき言った留学の話。なんか「留学に行け行けっていう空気あるけど、どこまで正しいんでしょね。」みたいな。中入生でニュージールランドに行ってるから、その後、どんな風に感覚、感性変わったかとかを全員にアンケートとって、グラフ作ってみたいな。「もし学校行事として海外研修行くんだったら、事前にその意図をちゃんと理解させておかないと意味ないよ」っていうことを最後に言うっていう、学校に若干喧嘩売りたいな（笑）。

—わははははは。濱野さんはニュージールランド行っただうでしたか。

俺は楽しかった。あ、でも、ちよつと海外は興味あったんかな。ただ、英語力が上がったかという、上がりませんでした（笑）。英語は正直苦手やった。他の教科に比べたら英語苦手やわと思って、行つて、ホストファミリーとマジで喋れへんなみたい。サンキューぐらいしか言つてない感じやつて（笑）。当時そんなぐらいい。「終わったな。楽しかったな。」やつたけど、今思つたらすごい色んな経験できた。それこそ今、生徒相手にエピソードとして喋れることもいっぱいできたから。そうね、今思い返したらなんかよかったなと思うね。ああいう経験つて。—中学でニュージールランドですか。

中学。

—高校の海外研修はどこ行かれたんですか。

これがまたすごい話で。バンコク、タイやつたんですよ。当時五こぐらいコースがあつて。で、タイやつて。ところが行けてないんですよ。

—えー！

なぜかという、タイの村に入つていって、一緒に家を建てるつていうコースやったのね。絶対おもしろい。これは絶対ここやろかと思つて、それで選んだ。でも、行く半年ぐらい前にタイで軍事クーデター

が起きて、空港占拠されて、外務省が渡航禁止みたいになつて。「このままやたらいけません」つてなつて。マジであれほど平和を願つたことない（笑）。「頼む、行けへん、行けへん」とかなつて、「もう無理です」つてなつて行けへんかった。

—えー！じゃあ修学旅行なかつたつてことですか。

そうです。その期間、そのメンバーだけ学校行つて（笑）。なんかタイの映画とか、映像とか見てさ、話し合いとかして、やっぱ楽しいよ、一個一個は。タイのお菓子とかさ、「煽つてんのか？」とか思つてたけど（笑）。「行つてへんねん」つて言いながら、笑いながら、トムヤムクンとかさ、やつたけど（笑）。でも、あれはあれで面白かつたな。卒アルの海外研修の写真、俺等だけ教室でイェーイみたいな（笑）。—やばい。悲しいですね（笑）。

でも、めっちゃいい経験になつた。俺は全然落ち込んでるつもりなかつたけど。親にしてみたら、「相当落ち込んでたんやろうな」「可哀そうやな」と思つたと思うねんな。三十万ぐらい積み立てしてるやん。で、どうせ積み立てたものやから、どっか行くのに使つたらつて話になつて。高三の年末年始の時期に、その三十万で「俺はタイには行けへんけど、隣のカンボジアで！」つてなつて、カンボジアに一人でいった（笑）。

—えー！すごい。

ほんとで向こうの孤児院で、半日ぐらいは子供の遊び相手してあげる。一緒にサッカーしたり、畑見に行つて、言葉ようわからんけど、なんか子供らが説明してる。いや、ほんまに楽しい。なんか現地の食べ物食べたり。んで、孤児院みたいな施設がお休みですつていう時に、アンコールワット行ったりできますよみたいなツアーやつて、めっちゃ楽しかつ

た。それがめっちゃええ経験。カンボジアのアンコールワットで見た日の出。もうウルトラ綺麗やったね。めっちゃ綺麗でもう感動した。すごいと思って、来てよかったなって思った。もう来たらやばいよ。

―感動ですね。

でも、ここもすごい歴史があつて。ぞっとした。内戦の時に、アンコールワットの周りにお堀があるんやけど、その周りに穴が開いてる岩がいっぱいあるの。でね、「なんでか知ってますか。」みたいな。日本語話せる方がガイドでいて、「これ弾丸です」と。何かというと、そこのお堀の前に捕虜をロープにつないでずーっと並べて、兵士がダダダダって打っていく。それで処刑するっていうのがあつて。「その時の跳ねた弾丸とかが当たった痕跡がこれです」って。そう思うと、今普通に平和にここを他所の国の人々が笑いながらイェーイって写真撮ってつてしてるけど、ここでこんだけの人が死んでる。そういう意味も含めて、ここは印象に残ってる。

―普通の観光ばっかのプランじゃなくて、そういうプラン選んだのはなんですか。

どうやろ。でもやっぱタイで家建てるみたいな、そんなんやってたから。で、結局行けんかったけど、その間、田辺記子先生が担当やったりしたから、国際理解のいろんな授業とかしてくれはって。すごい印象残ってて。だから、そういうところに行きたいなっていう。どうせ行くならみたいな感じやったね。

*

仲間と過ごした青春の時間

―部活はなにか入られてたんですか。

部活はね、サイテックでした。うん。今はめっちゃロボット頑張って

はるんでしょ。当時もロボットはあつたけど、俺はロボットじゃなくて、川の自然とか水環境がどうのこうのみたいな。「汚い水になって、これを改善するのにどうしたらいいか」みたいな研究をやるっていうやつやって。めっちゃ楽しかったけど、あんまり詳しいことは分からず。でもその時間がめっちゃ楽しかった。

あとは、軽音部が作りたかったんよ。友達と二週に一回、でもハマった時は週一とかでやってた。中三の時の音楽の授業でギターの授業があつて、「楽しい、おもしろ！」ってなつてはまった。高一になる前の春休みに、お年玉とかで安めのエレキ買って、高一の一発目の自己紹介の時に、「ギター始めようと思ってます。誰か他の子いませんか。ドラム、ベース、歌の子いたら一緒にやりませんか。」って言ったら、ドラム習ってる子がいて、「一緒にやろう」って言ってくれた。で、四月に宿泊研修みたいなのがあつて、たまたま同じ部屋やった子と喋ってた。ら「ギターやるって言ってたよね？集まってんの？」って言われて。ドラムの子も声かけてくれて。ドラムとギターは揃った。「あと、ベースと歌、いないよね」ってなったら、「俺ベース買うわ」みたいな。マジでその場の一つ返事で、ベース決定した（笑）。

―青春ですね。

そういや、文化祭でもやったわ。大学行ってからもちよっとだけ続けて、俺、ちよっと教職忙しくなりすぎて、途中でやめちゃったんやけど。当時やってたドラムの子とベースの子は、今も続けとる。社会人してるけど、アマチュアで。年に一回ぐらい集まって、「ご飯食べるついでにちよっとスタジオ行か」みたいな。明らか、俺だけ下手なんやけど（笑）。その二人いつもやってるから、「俺、年に一回なんよ。ごめん、ジャカジャカしかできんかも。ソロ弾けんかも。」みたいになどた

どしくやってたり（笑）。

*

有限だからこそ全力で

—どうして教師になろうと思ったんですか。

もともと学校ってそんなに好きじゃなかったんよね。立守は好きやったんやけど、学校とか教員っていうキャラ自体があんまり好きじゃなくて。教育格差とかに関心もあつたけど、教員になるべきなのかどうか、すごい迷いはあつた。免許は取るけど、「俺ほんまに教員か？」みたいな。絶対合わんなと思つてた。

けど、大学の二回生の時に、ある滋賀県の県立高校のスクールサポートという、免許ないけど、学校のアシスタントができるっていう制度があつて。申し込んで、「面白そうやん」と思つて行つたら、ちょっと大変な学校やつて、教室入らん子もおるし、遅れて来る子もおるし。でもちよつとずつそういう子が話しかけてくれるようになって、「この子らの喋りを聞けるとしたら、なんかやる意味あるかも。教員いいかも」って思つた。教員に決めたのは、二回生の時。それが一番でかつたですね。

—実際教員やつてみてどうでしたか。

めちやくちや大変。めちやくちや忙しい（笑）。でも、面白い仕事やと思う。やりがいはいめちやめちや。実際教員になつてからも、しんどくて休まなあかん時期もあつて。それでも復帰できるように頑張ろうつて思つたのは「一回、仕事休むような時期がもしあつたとしても、別に生きていくことは可能やで」ってことを伝えないといけないから。復帰して、別の学校に転勤するときの離任式で「自分はこれから頑張ろうと思う」みたいな話をした。そしたら、結構な子に思いを受け取つてもらつ

たみたいで。めっちゃ喋りに来てくれて、その時に「続けてて良かったな」と思つた。

それこそ教員になる人は絶対思つとかなあかんのが、我々はめちやめちや世間知らずなんですよ。大学出て、学校に戻つてきてるから。自分は世間知らずやぞつていうのをずっと唱えとかないと、調子乗つてしまふ。自分自身は二十代は教員の仕事を必死にやつて、三十代になったら次の仕事を見つけに行こうと思つてた。もう四十なつたらやめるつて決めてたし、今もそう思つてます。どんなに続けても、四十までかな。自分は、この仕事ずつとやつてたら、仕事柄、先生つて呼ばれてるだけのことを、自分が偉い人やと思つてしまふそうやなつて。うん、自分は思ふから、それまでにやめようかなと思ふな。

あとはステイブジョブズの大学の卒業式のスピーチが英語の教科書に載つてあつて。そこに、「毎朝、毎朝、今日が人生最後の日で自分は満足かつていうのを聞いけて仕事を始めてる」っていう言葉があつて。めちやくちやそれが印象に残つて。毎日ではないにしても、「今年この学年とかこの仕事がここで終わるつていうぐらいの気持ちでいこう」って。そういう生き方したいと思つた。そういう意味も含めてリミットは決めてる。「ここまでには自分は辞める」とか、もうなんやったら「今年で辞めてもいい」つていうぐらいで働かんとかかん。あかんつていうか、働きたいつて思つてるね。

—その考え方はずっと前からですか。

大学の時はそこまで思つてなかったかもしれんけど。でも、立守の子は割とエッジ効いてるから。なんか尖つてるみたい（笑）。めっちゃいい意味でなんやけど（笑）。だから、大学ぐらいの時に「これ普通に社会人として同じ場所に長くいれへんな」つていうのは思つてたかもしれ

れん。それまでの間にどれだけ痕跡を残せるかっていうか、何の価値をここに提供できるのかっていうスパンでやめる方が、なんか生き方としては合うんやろうなっていうのはあるな。

*

カードを増やす生き方

ーでは、ラスト行きます。もし高校生に戻るとしたら、何したいとかありませんか。

別に「これやとけよ」みたいなはないかも。そのまんまでえんちやうっていう。これは人生観みたいな問題やと思うけど、将来これになりたいから、今この種をまいてって計画的に進んでいく人もいると思うねん。そういう生き方も素晴らしいと思うんやけど、自分の場合はあんまりその感覚はなくて。もう興味に飛びついてるっていうか。「これ楽しそう、やろうとか、おもしろそうやろう、ここ行きたい、行ってみよう」って。ガンガンガンガン行く。でも、その時の一回一回の出会いをちゃんと大事にする。大学の二回生の時のこともそうやし、カンボジアの子たちもそうやし。それこそ修学旅行なくなっても、それで諦めるんやなくて、それをエネルギーにしちやおうっていう感覚持つて。後で振り返った時に、「あの時のあれは生きてたかも」って、今喋らせてもらって、気づいた。

俺はそういう生き方の方が合うなと思っていて。去年、仕事しんどなって休んだとかも。その瞬間は焦ったけど、「マジで親を心配させちゃうな」とか思った。でも、結果的に、今、学校ですごいキャッチフレーズ使ってるのは、「先生になってから不登校になりました。不登校になった先生です」っていうのを、自己紹介とかで言ったらうけてくれるのよ。で、小中不登校やった子とかもやつぱおるから、喋ってくれた

り。だから、なんかあっても、なんだかんだそれは生かされると思うし。

でも、何があるかもわからんし、まさか二年前に自分が休んでまうなんて思ってもなかったし。その当ても半年前に修学旅行消滅するなんて思ってもなかったし。だから、「こうしよう」みたいなこと考えてたって、そんなうまくいくわけないから。その時々でおもしろいと思うことやって。喧嘩もしたらいいし。法に触れへん限り、人の人権を傷つけない限り何をやってもいいので。「後でこれは意味あつたな」っていうカードを増やしとけばなんとでもなると思うよ。やから、「これしといたらよかったのに」みたいな後悔はないな。別に。うん。あの時ああいう生き方してたから迷惑かけたのかもわからんけど、今生きてるから結果オーライみたいな。迷惑をかけた人たちには謝りつつ、みたいな感じやと思います。こんなんでいいんか（笑）。

ーはい。今日はありがとうございました。

【感想】

特に印象に残ったのは「何かを計画的に積み上げるより、興味に飛び込み、出会いを大切にする」という考え方だ。さらに「その積み重ねが後で意味を持つカードになる」という言葉も強く心に残った。このような考え方に触れ、これからは自分の興味に素直に行動し、人との出会いを大切にしていきたいと思った。語り手の人生を知るだけでなく、自分の生き方を考えるきっかけとなり、貴重な経験となった。

（次ページへ）



左：語り手 濱野優貴さん

右：聞き手 若松陽花